



この挙殿と共にこれからも…

通卷第54号

《新春輯》

### 〈発行者〉

宇太水分神社  
神德宣揚奉讚講

頌

春  
令和八年丙午歲元日

謹んで新年のご挨拶を申し上げます。

本年も全国水道事業の発展とこの事業に携わるみなさまが健やかにご活躍されますことを祈念いたしております。

宇太水分神社 宮司 三家邦彦

私儀ですが、その当時大勢おられた古市場の大工

この度、高齢の父を継いで宇太水分神社第十九代宮司を、令和七年十二月二十日付で、神社本庁より拝命致しました。

この度、高齢の父を継いで宇太水分神社第十代宮司を、令和七年十二月二十日付で、神社本庁より拝命致しました。素より浅学菲才の身ではあります、崇神天皇の勅祭社であることを鑑み、この上は只管にご神威を畏み御神徳の高揚とご社頭の隆昌に努めてまいる所存です。

何卒格別のご指導とご鞭撻を賜りますようお願い申し上げます。

ところで私が生まれる凡そ一年前、昭和十四年九月十六日の台風二十号により、当社は甚大な被害に遭いました。三棟からなる宝本殿は、中央の第一殿が高野槅の倒木で傾きました。能舞台形式だった拝殿は、大櫻が折れたことにより、完全に倒壊する有様でした。鎮守の杜の中も、数多の杉檜が倒木しました。と、伺っております。

定本殿は、春日大社と当社のみで、また宇陀の式内大社でございます。

幼少時より、その重圧を感じながら育ちましたが、神職になり奉務をしておりますと、それは具体的なかたちを以て、身に染みております。

水は近年、愈々重要な問題となつております。それを均等に配られるご神徳と、遠近各地から

昭和三十五年にも造営しており、それから僅か十年余りで災害復興造営をせざるを得ません。現在も氏子総代をされている方のご尊祖父様が、造営委員長となつて下さり、数々の難題を解決する方策を、真剣に探つてくださつてゐる氏子総代方に支えられて、宮司としての歩みを始めていきたく、宜しくお願い申し上げます。

葺き替えが急がれる

いる例は稀であろう。例えば、近年国宝指定された京都市・祇園八坂神社本殿は、内陣を取り巻くよう拝空間が一体化しているためそれがない。そうした例は散見できるほどのことから寧ろそうしたお社は、深く印象に刻まれるよう思う。

昨年本稿では、二ノ鳥居を大修繕したことを取り上げた。鳥居は外部と神域の境を示す結界であることをお伝えした。瑞垣は神社の中核をなす本殿を囲むわけであるから、最も聖なる場所に接している故に、更に重要な構造物であると思つていい。

さて、当社の瑞垣である。国宝の本社本殿三棟及び重要文化財指定の摶社春日神社・宗像神社社殿を、背後に鎮守の杜があることから、三方より囲ん

昨年五月二日、伊勢の神宮では、第六十三回式年遷宮の始まりを告げる祭儀の山口祭及び木本祭が斎行された。続いて六月には、御社始祭などが続いて行われていき、本年からのお木曳行事へと続く端緒が開かれた。先ずはその御用材を確保する営みがなされいくのであるが、大量の檜の木材は棟をいたたく御正殿などの建物に用いられるだけではない。

その聖なる御敷地は広大な面積であるが、それを取り囲む垣が廻らされていて、然もそれは四重と斯くも嚴重なのである。それは参道などに面した外側から、板垣・外玉垣・内玉垣とあり御正殿を直接囲んでいるのが瑞垣である。それらの垣を造成するところの御用

それは虫歯を放置しておくと、酷くなり痛みが増すだけで、治らない如き喻えで、既に瑞垣屋根は猶予のない状況に至っている。それは即ち、歳月が経過すれば工費が更に増すばかりであることになる。しかし様々な要因から苦境にある氏子地域である。責任役員はそのような状況を懸念され目下、財源の見通しを熟慮されているところであります。

伊勢の神宮にあつての瑞垣の重要性を先に述べたが、当社に於いても聖域を囲む大切な構造物である。また平成の大造営の際に、県の担当者から伺つ

葺き替えるしか術がないのは言うまでもないことがある。しかし本殿は国庫金で大工賄えるが、付属建造物は所有者負担が基本である。については近い将来に工事を実施する方向で、参考見越を業者に出してもらつたところ、懸案だけでも凡そ二千万円を要することがわかつた。この機会にと丹塗りの塗装なども含めると、更に大幅に嵩む額が示された。

五株の本殿が作る株と千木のラインと絶妙な高さで、本社第二殿と摂社春日神社前に設えられた中門を交え構成されている瑞垣は、キリツと神域を引き締めている。

その檜皮葺屋根は、一面で触れた台風による復興造営より遅れること十年後の昭和五十八年に葺き替え、四十年以上が経過し傷みが著しくなっている。堅牢な間は狙われることはないが、腐食が進んでくると、境内に生息する人サビの格好の巣材として選ばれ、野地が現れる程に持ち去られている箇所がある有様である。

でいる。当社に遺る、恐らく大正時代に撮影されたと思しき社殿の写真があるが、それは瑞垣が取り扱われた状態で酷く荒廃した姿で写つてゐる。それまでも存在していたと想定するとして本殿の大修理が行われた後、改めて築造されたものが、現在に伝えられたのである。

落雷により杜の樹を焼く

昨年の撰社春日神社例祭の翌日七月二十二日、比較的乾燥していいる環境下雷を伴つた夕立があつた。本殿から約八十 m 離れた鎮守の杜の杉の大木に落雷して、樹冠から発火し幹が燃える事態となつた。灯台下暗しで：発見したのは私ではなく、芳野川の対岸に住んでおられる氏子の方が、夜が更けた時間帯に見つけられ、通報して下つたとのことである。当初地上からホースを伸ばして消防活動を試みられたが火元に届かず、翌朝より宇陀市防災へりにより水を投下すると大掛かりなことになつた。室生ダムから水を探り十数回往復されたが、洞の中に入つた火種は消えず、結局伐採して水をかけ、落雷してから一日近くを要して鎮火に至つた。境内に設置された避雷針の高さは、山の稜線に聳える樹木より遙かに低く、所有地の間に立つ構築物等のそれより

## 拝殿の鈴・新たになる

お陰様で拝殿前は、数年前に新調した賽銭箱と共に、美しく輝く鈴と艶やかな緒が参拝に来られた方々をお迎えしている。その涼やかな鈴の音は、神様も速やかにお聴きになられるであろう。



自 令和六年十二月一日  
至 令和七年十一月三十日

同  
誌  
抄



### 傷が顯著な瑞垣屋根

## 市防災ヘリによる社の消火活動

